

昌平中学校

帰国子女入学試験

〔過年度実施問題〕

国 語

(制限時間 50 分)

注 意

- (1) 係の先生の指示に従って、所定のらんに受験番号・氏名を書きなさい。
- (2) 答えはすべて解答用紙の決められたところに、はっきりと書きなさい。
- (3) 問題は1ページから11ページまであります。
- (4) 印刷のはっきりしないところは、手をあげて係の先生に聞きなさい。
- (5) 途中でトイレに行きたくなったり、気分が悪くなった場合は手をあげて、係の先生の指示に従いなさい。

| 受験番号 | 氏 名 |
|------|-----|
| | |

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文を一部改変しています。

十六世紀にはブラジルで、十七世紀に入るとイギリス領やフランス領のカリブ海の島々で「砂糖革命」が起こったことは、すでにみました。その結果、とくに十七世紀後半からは、それまでも想像もつかなかったほど大量の砂糖が、ヨーロッパに持ち込まれることになりました。そうなる当然、砂糖を消費することの意味も、急速に変わっていききました。

しかし、それ以前の十六世紀くらいまでは、じつさい、砂糖はなおヨーロッパでは、食品というよりは、「薬品」として用いられていたのです。そうでなければ、せいぜい権力者や富裕な人びとが、自分の権勢(※権力をにぎって勢力をはること)や財産をみせびらかすためのシンボルとして使われていたのです。

ある研究者によると、砂糖には、一般に五種類の用法があったことになっています。具体的にいうと、薬品、装飾品(デコレーション)、香料、甘味料、保存料の五つの用法というわけです。このうち最初の二つの用法は、①明らかに、まだ砂糖が貴重品であった時代に合った使い方です。

砂糖をほとんど万能の薬品とする考え方は、アラビアから主に十字軍によってもたらされたと思われませんが、多くの人びとが慢性的(※症状や病気が長期間にわたって持続すること)に栄養不良の状態にあった時代ですから、カロリーの高い砂糖は、どんな場合にも、即効性のある薬品となりえたのかもしれない。アラビアでは、すでに十一世紀の偉大な医学者アヴィセンナ(イブン・スナー)が②「砂糖菓子こそは、万能薬である」と断言していましたが、この人物が著した医学書は、少なくとも十七世紀までは、ヨーロッパの薬学の世界でも最高の権威とされるものでした。

十二世紀のビザンティン帝国の皇帝に仕えた医師も、「熱冷まし」としてバラの花の砂糖漬けを処方していますが、このバラの花の砂糖漬けは、ずっとのちまで西ヨーロッパでも、とくに結核の熱に対する解熱剤として重宝されました。もともと、バラの花に限らず、食品を「砂糖漬け」にすること自体は、砂糖をもうひとつの用法である「保存料」として用いていることにもなるのでしようが。

一般に、中世といわれる十五世紀ごろまでの時期には、ヨーロッパの医学の中心はイタリアにあり、とくにサレルノの医学校はよく知られていました。そこで用いられた医学書によれば、砂糖は「熱病、咳、胸の病氣、唇のあれ、胃病などに効果がある」とさ

れています。

十四、十五世紀には、ヨーロッパ全域に、当時「黒死病」として恐れられたペストが大流行しました。予防策もなければ、適切な治療法もみつきりませんでしたから、「黒死病」は人口の三人に一人が亡くなってしまふほどの猛威をふるったのです。これには、人びとはただ逃げ出すか、自宅に閉じこもるか、せいぜい杉の葉っぱをくすべて(※炎を立てない状態で煙らせながら燃やして)、自宅をいぶす(※煙がたくさん出るように燃やす。けむたくすること、)「消毒」するようなことしか対策がなかったのですが、このペストに対しても砂糖は有効だと考えられていました。

医学者たちは、アラビア仕込みの医学理論を振り回して説明しましたが、一般の人びとにとっては、そんな理屈はなくても、なにしろ砂糖はあんなに白くて、あんなに甘くて、あんなに高価なものだから、効かないわけがないと思われていたのです。近世、つまり十六世紀以降のヨーロッパでは、もはや手のほどこしようもない絶望的な状態を示すのに、③「砂糖を切らした薬屋のような」という表現が使われたといえます。砂糖はそれほど、医薬品としてなくてはならない存在となったのです。

このように、薬品として重宝された砂糖については、十二世紀イタリアの大神学者で『神学大全』という本を著したトマス・アクィナスが立役者となった奇妙な論争も起こりました。キリスト教で決められている断食の日に、砂糖を口にする^{だんじき}ことは、戒律(※信仰生活で守るべき生活の規律や規則全般)違反になるのかどうか、という論争がそれでした。アクィナス大先生の結論は、要するに砂糖は食品ではなく、消化促進などのための薬品であるから、たとえ④「くすり」である砂糖を飲んでも、断食を破ったことにはならない、というものでした。

(川北稔『砂糖の世界史』による。)

問1 十線部① 明らかに、まだ砂糖が貴重品であった時代に合った使い方です とありますが、その理由として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい

- ア 砂糖が貴重品であった時代には、庶民には砂糖を薬として使う方法や装飾品として使う発想がなかったから。
- イ 砂糖が貴重品であった時代には、裕福な人々の間で紅茶やお香などの香りを楽しむ文化があったから。
- ウ 砂糖が貴重品であった時代には、裕福な人々がそのような使い方をしていたことが文献に書かれていたから。
- エ 砂糖が貴重品であった時代には、砂糖を大量に使うことでより多くの財産を持っていることを示せたから。

問2 十線部② 「砂糖菓子こそは、万能薬である」とありますが、そのように考えられていた理由として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア バラの花の砂糖漬けのように保存料として砂糖は使われ、人間の健康も保存できると考えられていたから。
- イ 砂糖は様々な加工をすることができ、あらゆる薬は砂糖を加工することによって作られていたから。
- ウ 当時の人々は慢性的な栄養不足で、カロリーの高い砂糖は口にするとう効果の現れることが多かったから。
- エ アヴィセンナは砂糖が好物で、薬として扱えば自分のもとへ多くの砂糖を集めることができたから。

問3 十線部③ 「砂糖を切らした薬屋のような」について、次の(一)～(三)の問いに答えなさい。

- (一) この言葉が生まれた理由として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 砂糖は薬屋にとって重要なものであり、砂糖がない薬屋は仕事が成り立たなかったから。
- イ ペスト流行以前と異なり、砂糖は大量に流通しており、どんな薬屋にも置いてあるのが普通だったから。
- ウ 薬屋にとって砂糖は奥の手であり、その砂糖がないのは緊急事態に打つ手がなくなってしまうから。
- エ 当時はどの薬を作るにも砂糖が必要だったため、砂糖がなければ薬を作ることができないから。

(三) 同じような意味の表現として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 無用の長物
- イ 無い袖は振れない
- ウ 無いものねだり
- エ 無きにしもあらず

問4 一線部④ 「くすり」とありますが、「薬」と表記しなかった理由として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 現在と異なり、当時は砂糖に薬としての効果があると信じられていたから。
- イ アクイナスが断食の日でも砂糖を口にするためにうそをついていたから。
- ウ アラビアから伝わった砂糖を薬として使う方法がまだ広まっていなかったから。
- エ この頃にはもう砂糖は薬品としてではなく、食品として使われていたから。

問5 本文で示されている砂糖の使い方として**適当でないもの**を、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 唇のあれに効く薬
- イ 消化促進の薬
- ウ 食品の保存料
- エ 物々交換の対象

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、文章中に出てくる「歌舞伎」「能」「狂言」「浄瑠璃」は日本の伝統芸能のひとつです。

「俳優」と「役者」の違いは何だろうか。

「演技」と「芸」、「演出」と「型」の大きな違いが実はこの「演技」「演出」を支える「俳優」と「芸」や「型」に従う①「役者」との舞台の上での存在の仕方の違いによるところが大きい。

近代劇では「俳優」は自己を抹殺して戯曲（※演劇の脚本・台本。）のなかの人間を生きなければならぬ。「セールのスマンの死」（※戯曲名。ウイリー・ローマンはその主人公の名前。）でウイリー・ローマンを演じる滝沢修（※舞台俳優の名前）という自己を顧客の目からかくそうとする。これが「俳優」というものの実態である。

ところが「役者」というものは舞台の上でこれこれの役を私が勤めておりますということを観客にかくさない。

その一番顕著な例が舞台に古風な破風（※和風建築様式の屋根にみられる三角形の装飾板。この屋根を支えている前方の柱を「大臣柱」といい、舞台上の花道との境にある柱を「シテ柱」という。）をつくって大臣柱とシテ柱にかける看板である。最近の例でいうと市川新之助（※歌舞伎役者の名前。）初舞台の「外郎売」（※歌舞伎の演目名。）の舞台である。上手（※客席から向かって舞台の右側。）の大臣柱に「歌舞伎十八番、外郎売」という看板がかかり、下手（※客席から向かって舞台の左側。）のシテ柱に「市川新之助相勤め申候」という看板がかかった。これが歌舞伎の②元禄時代の古風な演出である。こういう看板の前で新之助が外郎売りになったとすると、観客はつねに新之助という「役者」が外郎売りという「役」を勤めている状況を見ることになるだろう。「役者」という言葉は元来「役」を勤める「者」というところからうまれたものであって、この「役」と「者」が併存しているところが「役者」という存在の大きな特徴なのである。

ちなみに「俳優」は「ウイリー・ローマン」という役に扮する」という。「役者」は「外郎売」という役を勤める」という。「役に扮する」とはその役になって人の目をごまかすことであり、「役を勤める」とは「勤め」ている状態をかくさずむしろあえて人目にさらすことである。ここに「俳優」と「役者」の根本的な相違があり、その相違を前提にはじめて「俳優」には「演出」「演技」という世界がひらける。舞台の上での人間のあり方が「俳優」と「役者」とでは基本的な構造において違うのである。

初代吉右衛門（※歌舞伎役者の名前。）の晩年の頃、一つの笑い話がある。今日から考えると吉右衛門はさして老齡というわけでもなかったのだが、よくせりふを③後見につけさせていた。プロンプターである。その声が三階席のてっぺんまできこえる。たとえば「引窓」（※歌舞伎の演目名。）で「狐川を左へ取り右へ曲がって山越えに」（※「引窓」に出てくる有名なせりふの一部。）というところでプロンプターの声がきこえるのである。一ト間（※少しだけ間をとること。ひと呼吸置くこと。）あって、吉右衛門が同じせりふを独特のせりふ廻しでいう。そうすると客席がワツという。プロンプターとのあまりの違いに吉右衛門がいかにも調子かに感動するからである。こんなことは近代劇では決して許されまいだろう。しかし、歌舞伎では平気だった。その平気の前提にはあの「役者」が「役」を「勤める」というのを見るところという前提がかくされているからである。

この吉右衛門の例を考えると吉右衛門のしゃべっているのはあきらかに戯曲のなかの言葉なのだが、一ト間さきにプロンプターが芝居の流れを中断しているのだから戯曲からはなれた一種独特の「芸」の世界であり、そこではまず言い廻し、調子というものが問題になっている。しかもこんなバカ気たことに対して吉右衛門が平気でいられたのも「狐川を左へ取り」というせりふ廻しに一つの「型」があつて、その「型」を吉右衛門も観客も信じていたからである。「型」というものがなければ「芸」はできないし、④こんなバカ気た話をだれも許容しないだろう。すなわち、この話から私たちは、「型」「芸」という独自の世界を展開する手品師としての「役者」というものの実態を知ることができる。そういう意味では「役者」は、素顔のまま舞台へ出る能役者（※能を演じる人）、狂言師（※狂言を演じる人）、義太夫（※浄瑠璃の流派のひとつ）、大夫（※義太夫を語る人）、三味線弾き（※和楽器のひとつを演奏する人）、人形遣い（※人形浄瑠璃を操る人）、あるいは寄席芸人（※落語、漫才、手品などの技芸を演じる人。）と同じ位相（※階層、集合。）にいる。化粧はしていても精神的にはつねに素顔でいて「型」によって「芸」を行ひ、また自分に戻ってくる存在である。

（渡辺保『劇評家の椅子』による。）

- 問1 一 線部① 「役者」とありますが、その説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 舞台の上で、「演技」「演出」を支えていることを観客に訴えるもの。
 - イ 舞台の上で「役」を勤めていることを隠すことなく観客にさらすもの。
 - ウ 舞台の上で、「型」という世界を展開する自分と観客とを一体化させるもの。
 - エ 舞台の上で、「芸」を演じていることをごまかしながら観客を感動させるもの。

- 問2 一 線部② 元禄時代の古風な演出 とありますが、その状況を説明したものととして最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 市川新之助という「役者」が、「外郎売」という演目をやっていることを古風な看板で宣伝して、観客の鑑賞欲求をおおっている状況のこと。
- イ 市川新之助という「俳優」が、「外郎売」という演目で外郎売りという「役」を演じていることを、観客が感動しながら舞台を観ている状況のこと。
- ウ 市川新之助という「役者」が、「外郎売」という演目において外郎売りという「役」を勤めていることを、観客が承知しながら舞台を観ている状況のこと。
- エ 市川新之助という「俳優」が、自ら古風な破風を作って大臣柱とシテ柱に「歌舞伎十八番 外郎売」という看板を掛け、外郎売りという「役」を勤めている状況のこと。

- 問3 一 線部③ 後見 とありますが、その説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。
- ア プロンプターとして、初代吉右衛門の公私にわたり気を遣うことに喜びを感じている人物のこと。
 - イ 舞台の本番において、初代吉右衛門が発すべきせりふを、ひと呼吸早く吉右衛門に伝える役回りのこと。
 - ウ 初代吉右衛門のせりふをすべて暗記しており、いつでも代役を勤める事ができるようにしておく人のこと。
 - エ 聞き取りづらい初代吉右衛門のせりふを、三階席まで届くような大きな声でサポートする役どころのこと。

- 問4 一線部④ こんな とありますが、その指す内容として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 観客が初代吉右衛門の芸を信じていること。
 - イ 独自の世界を展開する手品師の実態のこと。
 - ウ 「型」がなければ「芸」は存在しないこと。
 - エ プロンプターが芝居の流れを中断すること。

問5 本文で述べられている内容として**適当でない**ものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「演出」と「型」の違い。
- イ 「演技」と「芸」の違い。
- ウ 「現代」と「元禄時代」の違い。
- エ 「俳優」と「役者」の違い。

問6 本文の内容と一致するものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 歌舞伎役者は「型」を通じて「役」を演じることで「芸」を行い、その「型」を信じる観客に新たな体験を提供する。
- イ 近代演劇俳優は自己が演じていることをごまかしつつ舞台上立つ必要がある、素顔を観客にさらしてはならない。
- ウ 観客は役者や俳優が演じている姿にごまかされていることを承知の上で、舞台を鑑賞する姿勢が求められている。
- エ 寄席芸人や能役者は日本にしかない伝統と格式とを持って存在するので、独自の世界を守り続けねばならない。

三 一線部を漢字で表したとき同じ漢字を含むものを、それぞれのア～エから一つずつ選び、記号で答えなさい。

- 1 ラジオの音量をチヨウセツする。
- ア チヨウカクの検査を受ける。
 - イ おみやげをチヨウダイする。
 - ウ 選手がコウチヨウを維持する。
 - エ チヨウブン問題を解く。

2 ダンプカーでジャリを運ぶ。

ア 多くのリエキを出す。

ウ 用紙のリメンを使う。

3 テイサイを整える。

ア 圧力にテイコウする。

ウ セケンテイを気にする。

4 ヨウイに見分けがつく。

ア イチ情報を見る。

ウ イケンをまとめる。

5 産業のシンコウを図る。

ア 他人からのシンライを得る。

ウ サンシンの多いバッターだ。

イ 常にリソウを描く。

エ キョウリを懐かしむ。

イ テイクウ飛行で飛ぶ。

エ テイキ預金を解約する。

イ イギを申し立てる。

エ ヘイイな言い方をする。

イ シンロ活動に励む。

エ 医師のシンサツを受ける。

四

次の文の空欄に当てはまる表現を、あとのア～オから一つ選び、記号で答えなさい。同じ記号は二度使ってはいけません。

1 [] 魔法が使えたら多くの夢がかなう。

2 急に雨が降ることは [] ない季節だ。

3 集合時間には [] 間に合うだろう。

4 [] 岩のような立派な体格の持ち主だ。

5 正月には [] 祖父に会いたい。

【語群】

ア たぶん イ もしも ウ ぜひ エ まるで オ めったに

【五】 あとの語群の漢字を組み合わせて、次の1〜5の類義語を作りなさい。同じ漢字は二度使ってはいけません。

- 1 没頭
- 2 模範
- 3 介抱
- 4 知己
- 5 音信

【語群】

息・本・専・病・友・手・消・人・念・看・古

【六】 一線部のカタカナを漢字で書きなさい。

- 1 祖父は長年畑をタガヤしている。
- 2 冬の山はナダレが起きやすい。
- 3 オゴソかに卒業式が行われた。
- 4 彼女の第一インシヨウがとてもよかった。
- 5 タナバタの祭りが楽しみだ。

【七】 一線部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- 1 必死の形相で走るランナー。
- 2 冬至は夜がいちばん長い。
- 3 汽車の警笛を鳴らす。
- 4 奈良時代に建立された寺。
- 5 上京して商いを始める。

〔八〕 次の口部に共通して入る漢字を入れて、四字熟語を完成させなさい。

- 1 □信□疑
2 右□左
3 □三□四
4 以□伝

〔九〕 例にならって、後の「」内の表現の意味がよくわかるような短文を考えて書きなさい。文は二文以上でもかまいません。

例Ⅱ 急がば回れ ↓ 大事な仕事ほど急がば回れで慎重に取り組むべきだ。
「火に油を注ぐ」



帰国子女入学試験

過年度実施問題 解答用紙

国語

| | | | | | |
|------|--|--|--|--|--|
| 受験番号 | | | | | |
| | | | | | |

| | | | | | |
|----|--|--|--|--|--|
| 氏名 | | | | | |
| | | | | | |

| | | |
|----|--|--|
| 得点 | | |
| | | |

| |
|------|
| 日 |
| 問1 |
| 工 |
| 問2 |
| ウ |
| 問3 |
| (i) |
| ア |
| (ii) |
| イ |
| 問4 |
| ア |
| 問5 |
| 工 |

| |
|----|
| 日 |
| 問1 |
| イ |
| 問2 |
| ウ |
| 問3 |
| イ |
| 問4 |
| 工 |
| 問5 |
| ウ |
| 問6 |
| ア |

| |
|---|
| 日 |
| 1 |
| ウ |
| 2 |
| ア |
| 3 |
| ウ |
| 4 |
| 工 |
| 5 |
| ウ |

| |
|---|
| 四 |
| 1 |
| イ |
| 2 |
| オ |
| 3 |
| ア |
| 4 |
| 工 |
| 5 |
| ウ |

| |
|----|
| 五 |
| 1 |
| 専念 |
| 2 |
| 手本 |
| 3 |
| 看病 |
| 4 |
| 友人 |
| 5 |
| 消息 |

| |
|----|
| 六 |
| 1 |
| 耕 |
| 2 |
| 雪崩 |
| 3 |
| 敵 |
| 4 |
| 印象 |
| 5 |
| 七夕 |

| |
|-------|
| 七 |
| 1 |
| ギョウネウ |
| 2 |
| とつじ |
| 3 |
| けいてき |
| 4 |
| こんりゆう |
| 5 |
| あきない |

| |
|---|
| 八 |
| 1 |
| 半 |
| 2 |
| 往 |
| 3 |
| 再 |
| 4 |
| 心 |

| |
|---|
| 九 |
| 「でも、そちらの「も」が重複するポイントがあるので、「か」と言ってしまう、火に油を注ぐ結果となった。」 |
| (例)怒っている相手をなだめるための話し合いをしようとするとき「 |